高知大学 病院ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長　森信　繁
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長　横山　彰仁

第3期 国立大学法人高知大学中期目標・中期計画
［医学部附属病院］

高知大学は、四国山地から南海トラフに至るまでの地球環境を眼下に収め、「地域から世界へ、世界から地域へ」を標語に、現場主義の精神に立脚し、地域との協働を基盤とした、人と環境が調和のとれた安全・安心で持続可能な社会の構築を志向する総合大学として教育研究活動を展開することを掲げています。

その中でも、附属病院は、安心・安全に配慮し、がん・地域医療・災害医療など社会的ニーズの高い医療に対応するために、「先端医療の開発・導入の促進と地域医療を支える医療人の育成」を掲げ、これらの目標の達成に向けての取組を盛り込んだ計画としています。

1 社会ニーズに呼応した病院機能・運営の強化を図るとともに、地域医療の中核機関の役割を担うため、地域との連携を強化する。【15】

1）医療の質・安全の向上に資するため、クオリティ・インジケーター（診療の質指標）の測定結果の分析、評価、改善等を行う。特に医療安全や感染対策の質を向上させるため、医療従事者への教育・研修体制を充実するとともに、その取組について国立大学病院間相互チェック等を通じて、病院機能・運営を強化する。【32】

2）地域医療の中核機関として、がん・地域医療・災害医療など社会的ニーズの高い医療に対応するため、がん治療センターを中心とした集学的治療や低侵襲性の治療技術の向上、救急医療体制の充実を行うとともに、トリアージ訓練など大規模災害に備えた災害医療教育を行い医療従事者の災害対応技能を向上させる。【33】

3）地域医療を担う大学病院として、在宅医療・介護連携のICTシステムを構築し、情報端末等を活用した在宅医療を推進するなど地域医療ネットワークを充実する。【34】

2 地域特性に根差し、国際社会にも貢献しうる医師・医学研究者等を養成する。特に、地域医療を担う医師・メディカルスタッフの養成を積極的に行う。【16】

地域医療等を担う医師・メディカルスタッフの養成や地域への定着を促進するために、地域医療の観点から卒前・卒後・専門医・生涯までの一貫したキャリアアップのための教育・研修プログラムを提供するなどの教育研修体制を整備する。【35】

3 先端的で特色ある研究を推進し、その研究成果を医療現場に還元するため、先端医療の開発・導入を促進する。【17】

次世代医療創造センター及び先端医療学推進センターを中心に、我が国初となる「小児脳性麻痺に対する自己臍帯血輸血による治療研究」をはじめ、再生医療における臨床及び基礎研究などに取り組み、特色ある先端医療研究を実施し、新しい診断・治療法の開発・導入を推進する。【36】

4 安定的な経営基盤を確保するため、環境の整備、経営管理指標等を活用した戦略的な経営改善を行う。【18】

1）患者本位の医療サービスや医療を取巻く環境の変化に対応するため、第2期中期目標期間から継続している病院再開発を着実に行い、質の高い医療環境を整備する。【37】

2）安定的な経営基盤を確保するため、経営管理指標、診療科別診療状況等から経営状況を把握・分析を行い、効果的な増収策及び経費削減に向けた改善策を策定・実施し、健全で効率的な運営を行う。【38】

2016年度
上半期

防災特集

今年度の上半期に高知大学医学部附属病院にて開催された、防災に関する講習や訓練についてご紹介します。この他にも、高知大学医学部附属病院では防災に関する様々な講習等を行っています。

第5回院内災害対応訓練講習会(Disaster ABCコース)の開催

災害・救急医療学講座
特任教授
長野　修

5月15日(日)、第5回院内災害対応訓練講習会(Disaster ABCコース)を医学部実習棟3階で開催しました(主催:災害・救急医療学講座)。

災害医療教育プログラムは多数存在しますが、このDisaster ABCコースは災害時に多数の傷病者の受け入れを担う医療機関(救護病院や災害拠点病院)の全職員を対象とした初心者向けのコースです。災害対策本部やトリアージ、治療／搬送などのスキルステーションを全員が一通り経験することで、災害医療に関する全般的な理解を深めることができました。

今回の受講者は、歯科医師2名、初期研修医20名、看護師14名(学外者5名)の計36名で、医療人育成支援センターの協力により、1年目の初期研修医は全員参加することができました。62名のボランティア(看護学科学生等)が模擬患者役を担当し、インストラクターは外部講師6名とインストラクター補助として9名(本学DMAT隊員3名)が務めました。見学者31名(県内10施設)と運営スタッフ10名を加え、全参加者は154名でした。

トリアージ

また、医学部学生の災害医療研究会メンバー14名による避難所運営ゲーム(HUG:ハグ)も、昨年に引き続いて同時開催しました。これには、看護師10名(学外者7名)、事務職1名(学外者)、看護学科学生21名の計32名が参加しました。南海トラフ地震に際しては住民による避難所の自主運営が必要であると指摘されており、避難所運営は県民の共通課題のひとつです。エコノミークラス症候群や集団感染などの公衆衛生上の問題もあり、医療者としても避難所運営に無関心ではいられません。8月末に行われる研修医のサマーキャンプでは災害医療をテーマに取り上げるとのことで、若手医師の災害医療への意識は確実に向上しており、本講習会開催の意義は大きいと考えます。

昨年、高知県災害時医療救護計画が改訂され、災害急性期に負傷者の後方搬送が困難な局面においては、負傷者により近い救護病院や救護所での医療活動が重要として災害医療の「前方展開」が、また、医療者だけでなく住民も応急救護に参画する「総力戦」が必要になるとされました。そのために、医師を対象とした災害医療研修制度が本年秋にスタートします。この制度は、全ての医師が災害に備えるトレーニングプログラムを受け、「災害対応力」という2つ目の専門性を持つことの必要性を強調した、世界医師会のモンテビデオ宣言(2011年11月)の具体化であると言えます。県内外における災害医療教育の発展を望むばかりです。

全体訓練

上段／通信　下段／避難所運営ゲーム『HUG』

災害時における情報伝達訓練を実施しました

会計課

6月16日(木)、医学部では約30名が参加して情報伝達訓練を実施しました。

今回の訓練は、災害対策本部内実務を担当する事務職員を対象に、クロノロジー(時系列による記録)作成を重点としました。

まず、情報伝達に関する座学を受け、訓練コントローラーが提供する模擬情報を元に各自がクロノロジーを作成し、その作成したクロノロジーについて隣の席の者と交換を行い、互いに検証を行いました。

次いで、2班に分かれて先ほどと同じ模擬情報を用い、災害対策本部長・通信担当・ホワイトボード担当等に分かれ、クロノロジーの作成を行いました。

その後、5班に分かれ、先ほどとは異なる短い課題の情報伝達演習を繰り返し実施しました。まずコントローラー役の職員が班長を指名、班長はその他の担当を決定し、それぞれの担当が割り振られた後、トランシーバを介して提供される情報について、①受付(通信)⇒②集計(評価)⇒③記録(転記)の手順で進めました。演習ごとに振り返りを行い、次の演習に進むという方式で訓練を行いました。

当日は、訓練直前に北海道で大きな地震が発生したこともあり、緊張感を持って訓練を行うことができました。

トランシーバを通じて災害対策本部に寄せられる情報を付箋に記録する情報班員

付箋に記録された情報はホワイトボードに経時的に記録される

消火訓練・避難誘導訓練を実施しました

会計課

7月27日(水)、夜間に附属病院第一病棟1階から出火したとの想定で、消火訓練・避難誘導訓練を実施しました。

屋内消火栓で初期消火を行う

煙を警戒しタオル・マスクをして病棟から避難

マニュアルに従い、救急部当直医を自衛消防本部長代行とし、警備員・事務当直などの業務委託職員も参加して手順を確認しました。

時間外との想定で行われたため、病棟スタッフのほかは、薬剤部等の当直者4名のみが避難誘導の応援に駆けつけました。医師・看護師等のスタッフは懐中電灯、ヘッドランプを装着、煙に備え患者役も含めた全員にタオルやマスクを配布した上で避難しました。

スタッフは患者役に要所要所で声掛けを行い、重症度の異なる患者さんを移動させるためスムーズな隊列を組むなど、これまでに積み重ねてきた訓練の成果を確認できた部分もありました。

実動終了後にはグループごとの振り返りに加え、全体振り返りを行い、熱心な意見交換が行われました。部署リーダーに訓練放送を聞く担当を割り振ったため、放送が行われている間は指示が出せなかった、避難完了報告時にスタッフの人数を言えなかった等の反省もありました。

今回は他病院からの見学者に加え、附属病院で実習中の看護学校の学生さんの見学もありました。将来看護師として勤務される際には、この経験を役立ててくれればと思います。今後も万一に備え想定を変えながら、消火訓練・防災訓練に取り組んでいきますので、皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。

医療人育成支援センターについて

医療人育成支援センター センター長 **渡橋 和政**

『医療人育成支援センター（Center for the Support and Development of Medical Professionals）』が、本年4月に発足いたしました。学生の臨床技能研修から初期臨床研修、専門医取得、キャリア形成までを一貫して支援する組織です。これまで学生の臨床技能育成は学生課、初期臨床研修医の育成は卒後臨床研修センター、後期臨床研修や専門医取得、キャリア形成は大学の講座と地域医療支援センターが中心となり各病院、高知医療再生機構と連携して支援を行っていましたが、3部署を一つの枠組みとすることで、シームレスな支援を提供しやすくなりました。

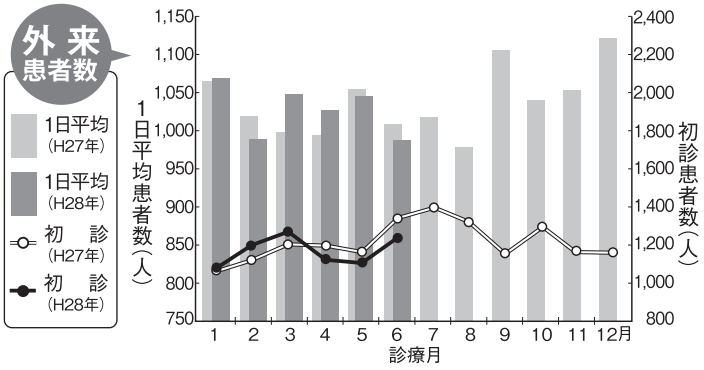
このような組織改編の背景には、それを必要とするいくつもの情勢変化がありました。学部教育で、4年次に共用試験（CBT）と臨床技能試験（OSCE）に合格した上で臨床実習を開始するのは従来どおりですが、『Student doctor』という資格として、従来以上の臨床技能習得をめざします。また国際認証システム（医学教育認証評価）が導入され、より高度で長い時間の臨床実習が求められます。医師国家試験では、数年内に「知識のみならずより臨床ベースの思考過程を求める出題」に変わる予定です。つまり、初期臨床研修の修練内容が学部教育に前倒しとなる形です。初期臨床研修においても、『経験すること』で評価されてきた研修システムから『何ができるようになったか』というアウトカムが重要視され、研修の内容と質が評価されます。当院も臨床研修評価を受審する準備を進めています。専門医を目指す後期臨床研修では『新専門医制度』が導入されつつあり、より短期間で標準レベルの専門医を育成する枠組みができつつあります。大学病院も各基盤領域における基幹施設としての役割を担うことになります。

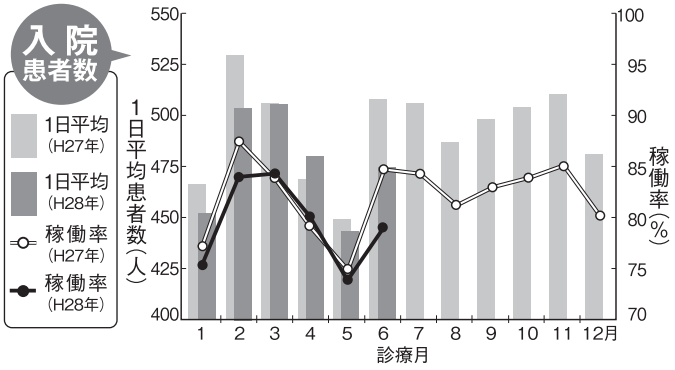
これらの新たな状況に加え、女性医師の増加とともに妊娠・出産・育児と医師としてのキャリア形成によりいっそうの支援が必要となり、留学、学位取得、進路変更なども新専門医制度導入に伴って支援体制を整える必要があります。

このような新たなニーズを受け、支援をする側がシームレスになることは必要不可欠であり、実際に成果を生むことが重要となります。従来の枠組みを超え、世代を超えて関わり合うことによりこの目標をより確実に達成できるよう、センターでは各ステップにおける個別の支援に加え、複数ステップ合同の活動を企画しながら情報、認識の共有をよりスムーズに行えるように図りたいと考えています。これらをより円滑に進めるため、Institutional Researchの機能を構築中です。従来の部署は『部門』と名称を変え、緊密な連携を通じて強みを生み出し、結果的に高知県の医療人をより効率的に育成し明るい未来への橋渡しとしなければなりません。そこで、センターのロゴを『高知県の形の虹』といたしました。3部門がそれぞれ単独で果たす支援（3種類）に加え、2部門合同で行う支援（3種類）、3部門総出で行う支援（1種類）と計7種類の支援が整然と重なり合い、高知県の明るい明日に向けて橋渡しをする、という願いを込めています。この紙面はあいにく白黒のためロゴをうまくお見せできませんので、ぜひセンターのHP（http://kms-kenshu.city-net.jp/greeting.html）にお立ち寄り下さい。初仕事として、一時紛糾し迷走しかけた新専門医制度に関する最新情報をアップデートしながら学生～初期研修医に提供することからスタートしました。今後、さらに活動を拡げ、よりよいセンターにしていきたいと思っていますので、ぜひご意見、アドバイスをお寄せ下さい。

医療人育成支援センター ロゴ

診療状況





編集後記

本年度より、病院ニュース編集委員会副委員長を仰せつかりました。微力ではありますが、委員長の森信　繁先生をお手伝いして、病院の今を伝え、未来に繋がる広報誌となるように努めたいと思います。

本号では、本院の進むべき未来を示す「第3期国立大学法人高知大学中期目標・中期計画」、平時からの災害医療の向上を目指した取り組みをまとめた「2016年度上半期防災特集」、シームレスな医療人育成支援を目指して本年4月に組織改編により開設された「医療人育成支援センターについて」を特集記事として取り上げさせて頂きました。いずれも、まさに今、刮目すべき話題ばかりであり、読者のみなさまにご満足頂けるものと信じております。

よさこい祭りの熱気にも負けない本号に続き、次号も、熱く、楽しく、元気いっぱいの話題をお伝えしたいと思います。是非、みなさまの職場における素敵な出来事、新たな取り組み、素晴らしい成果などを教えてください！　お待ちしています！　（文責：井上 啓史）